



TITLE:

雜報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雜報. 天界 1928, 8(90): 413-424

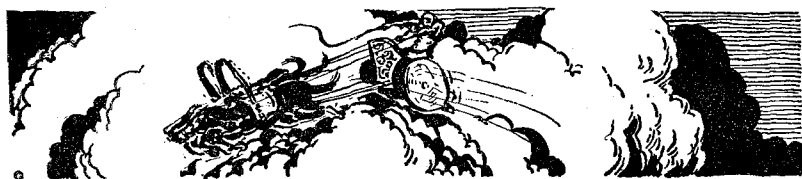
ISSUE DATE:

1928-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161328>

RIGHT:



## 雑 報

### UU Her 星の 変化

B. P. Gerasimovic は H. B. 857 に於て此の星に關する 592 回の觀測から 32 個の極大光と 50 個の極小光を導いて、次に記す興味ある結果を報告して居る。それによると 1899—1900 には變光週期は大體 45 日で變光範圍は比較的に大きくて 1.5 等となり、1901 年には(突然の様に思はれる)週期は 72 日と 73 日の間で、變光範圍は割合に小さく 0.8 等、しかも極大は非常に長く平からでまこを極大と定めてよいか困難である。1905 年までこの週期は繼續した。然し 1902 年には極大は少し短くなり變光範圍は 1 等位まで増した。1902 年には極大も極小も同じ位に繼續し變光範圍は 1.5<sup>m</sup> までもました。此の變化は 1904 年まで進み最大値 1.8 等或は 1.9 等にまで達した。1905 年に又突發的變化起り週期は 45 日に縮まり變光範圍は 1.0 等で 1910 年まで續いた。1909 年から 1910 年までは觀測がないが 1909 年には變光範圍は著しく少く、少くとも 100 日程は不變で 9.6 等であつたと言ふ事が出来る。1910 年に變光範圍 0.7<sup>m</sup> で 72 日といふ週期が再び表はれたが 1911 年には 45 日の週期に入からはり 1919 まで繼續した。この間では變光範圍の變化はゆるやかで 1914—16 年までは 1.4 等まで増しそれから 1918 年までは減少を示した。1918 年には變光は僅で不規則の様に思はれる。1919 年に 72 日の週期現はれ翌年まで續く。1921—1927 の觀測材料は乏しいが 45 日の週期を示して居る。

1901—1903 年に對しては 極大 = J.D. 2415947 + 72.63E

1905—1907 極大 = J.D. 2417095 + 45.53E

1911—1916 極大 = J.D. 2419216 + 45.28E

1916—1927 極大 = J.D. 2423010 + 45.28E

72.6 日と 45.4 日の二つの週期は 9.1 日といふ共通因子を有して居る。此が光度變化の基本的週期を考へられるかも知れない。

此の星のスペクトル變化をウイルソン山天文臺で見出して居る。平均分光型は G. 視線速度は  $-130 \text{ km/sec}$  となつて居る。

以上記した所によつてこの星を變光星のきの型に入れるか、RV Tauri 型星とも或は又 U Geminorum 型星とも何等の類似點を示して居らない。恐らくは今日知られてゐない變光星の特殊な或る型の代表的のものかも知れない。

### 新 變 光 星 194 個

ドイツ A. G. 協會の變光星委員 P. Guthnik, R. Prager 兩氏の名によつて最近發見の新變光星 194 の命名表 (第 25 回) が A. N. 5565 發表された。〔天界〕第 84 號第 143 頁の續きである。之れで公認された變光星の總數は 3220 個となつた。

此の新しい 194 個の變光星を星座別にして見るに、

Antlia	座のものが	1個	(RS 星)
Ara	〃 〃	2個	(UX 星から UY 星まで)
Aquila	〃 〃	1個	(EQ 星)
Canes Venatici	〃 〃	1個	(SU 星)
Carina	〃 〃	1個	(FX 星)
Centarus	〃 〃	3個	(BC 星から BE 星まで)
Cepheus	〃 〃	1個	(VY 星)
Circinus	〃 〃	1個	(V 星)
Coma	〃 〃	1個	(RY 星)
Corona Austrina	〃 〃	14個	(VY 星から AB 星まで)
Crux	〃 〃	1個	(SJ 星)
Cygnus	〃 〃	5個	(DM 星から DQ 星まで)
Dorado	〃 〃	2個	(RZ 星と $\beta$ 星)
Hercules	〃 〃	2個	(AW 星から AX 星まで)
Horologium	〃 〃	1個	(RS 星)
Hydra	〃 〃	1個	(TW 星)
Indus	〃 〃	2個	(RU 星から RV 星まで)
Lacerta	〃 〃	25個	(VZ 星から AO 星まで)

Lupus	〃	〃	1個	(SX 星)
Monoceros	〃	〃	1個	(UX 星)
Musca	〃	〃	1個	(SZ 星)
Norma	〃	〃	1個	(SS 星)
Octant	〃	〃	3個	(SU 星から SW 星まで)
Ophiuchus	〃	〃	6個	(BL 星から BQ 星まで)
Orion	〃	〃	1個	(CN 星)
Pavo	〃	〃	1個	(SW 星)
Phoenix	〃	〃	4個	(RS 星から RV 星まで)
Pictor	〃	〃	2個	(RS 星から RT 星まで)
Puppis	〃	〃	2個	(TW 星から TX 星まで)
Reticulum	〃	〃	1個	(T 星)
Sagittarius	〃	〃	73個	(FT 星から KV 星まで)
Scorpio	〃	〃	21個	(BU 星から CR 星まで)
Taurus	〃	〃	2個	(WZ 星から XX 星まで)
Triangulum Australe	〃	〃	1個	(RW 星)
Tucan	〃	〃	3個	(TZ 星から UV 星まで)
Vela	〃	〃	2個	(AE 星から AF 星まで)
Volans	〃	〃	1個	(X 星)
Vulpecula	〃	〃	1個	(WX 星)

此の194星の内、148星(即ち7割6分)は Harvard College 天文臺で發見したものである。又此等は大體 1927—1923 年頃の發見であるが、珍らしく CK Scorpii は 1904 年の發見、CN Orionis は 1906 年の發見で、近頃まで確證がなかつたさいふ例もある。又、 $\beta$  Doradus は 4.2 乃至 5.6 等級の肉眼星である。(「天界」第 83 號第 95 頁參照)

此の中に新星(Nova)が 3 個ある。即ち

XX Tauri	051316	發見者	{Schwassmann Wachmann
GR Sagittarii	181625	〃	Woods
HS Sagittarii	182221	〃	Woods

又、RR-Lyrae 型のものが

RY Comae	130023	發見者	Guthnik 及び Prager
BU Scorpii	160821	〃	Luyten
BV Scorpii	160823	〃	〃

BO Ophiuchi	<u>165329</u>	〃	Lugten
IR Sagittarii	<u>182730</u>	〃	Woods
SW Pavonis	<u>194767</u>	〃	Gerasimovic

又、U Geminorum 型のものは、

CL Scorpii	<u>164830</u>	発見者	Luyten
------------	---------------	-----	--------

又、R Coronae 型のものは、

GU Sagittarii	<u>181824</u>	発見者	Luyten
---------------	---------------	-----	--------

又、RV Tauri 型のものは、

XY Lacertae	<u>221452</u>	発見者	Hoffmeister
-------------	---------------	-----	-------------

尙此の中にボン調査(B.D.)の星が4個、コルドバ調査(Co.D.)の星が19個、ケーブ寫眞調査(C.P.D.)のものが12個ある。

### 太陽黒點週期の新研究

太陽黒點の週期については R. Wolf, N. Thiele, A. Schuster, 木村榮, H. H. Turner 等の研究が既になされてあるが(「天界」第62號第120—122頁), 最近に澳國 Wien 大學 S. Oppenheim 教授は A.N. 5566(第232卷第369—376頁)に其の獨自の研究を發表した。Oppenheim 氏はさきに Berlin 大學天文臺長 P. Guthnick 氏が有名な變光星ミラ(くちら座オミ星)の極大光輝の時期が(ユリウス通日で表はせば),

$$\begin{aligned}
 &2415574.96 + 331.6926E \\
 &+ 9.5\sin(1.04E + 245.8) \\
 &+ 11.5\sin(3.85E + 124.1) \\
 &+ 17.5\sin(4.56E + 307.2) \\
 &+ 12.3\sin(9.12E + 71.8)
 \end{aligned}$$

さいふ數式によつて表はし得るこを發表したのを見て、之れを多少改良し、遂に上式の( )の中をそれぞれ

$$\begin{aligned}
 &1.5 (E + 163.9) \\
 &3.0 (E + 161.4) \\
 &4.5 (E + 148.3) \\
 &9.0 (E + 168.0)
 \end{aligned}$$

を書きかへ、更に一步を進めて、全體の式を

$$T = \phi E + \sum a_m \sin[m\psi(E + 160.4)] \quad m=1,2,3\dots 6$$

$$\text{但し} \quad \varphi = 331.6926 \quad \psi = 1.5$$

を改めた。之れに勢ひを得て、Oppenheim氏は次ぎに太陽黒點の研究に向つたのであるが、其れには去る1913年に木村榮氏が Wolf-Wolfer の黒點相對數(『天界』第62號に詳説せり)の調和分析によつて29個の週期を見付けたのを改良せんを志し、遂に黒點極大期は

$$\begin{aligned} T = & \phi t - 103.932 + [1.4813]_n \cos 3\psi t \\ & + [1.2513] \cos 4\psi t \\ & + [1.7153]_n \cos 5\psi t \\ & + [1.2096] \cos 7\psi t \\ & + [1.5607]_n \cos 8\psi t \\ & + [1.4535] \cos 9\psi t \end{aligned}$$

又、黒點極大期の相對數 は

$$\begin{aligned} R = & 100.0 + [1.3126] \cos 5\psi t \\ & + [1.4045]_n \cos 6\psi t \\ & + [1.1030]_n \cos 7\psi t \\ & + [0.6999] \cos 8\psi t \\ & + [1.3111]_n \cos 9\psi t \end{aligned}$$

で表はすこゝに成功した。但し、上の兩式に於いて

$$\varphi = 32^\circ = \frac{360^\circ}{11.25}$$

$$\psi = 0.^\circ 80 = \frac{360^\circ}{450}$$

$t = 1958.5$  から數へ始める年數である。

之れに據るこゝ、太陽の黒點活動は11年25日、450年を、二種類の週期によつて支配されてゐるこゝとなる。

尙ほ Oppenheim 氏は此の論文に附圖を付けて1750.5年から1923.0年までの計算値を觀測値を比較し、更に1940.5年までの黒點變動を豫言してゐる、其れによるこゝ、黒點の相對數は

1921.5	32	1928.5	134	1935.5	54
1922.5	7	1929.5	116	1936.5	91
1923.5	1	1930.5	79	1937.5	119
1924.5	17	1931.5	38	1938.5	124
1925.5	62	1932.5	9	1939.5	108
1926.5	92	1933.5	0	1940.5	64
1927.5	125	1934.5	18		

そして將來の太陽黑點極大期は 1927.6, 1937.6, とし.

又, 黑點極小期は 1922.7, 1932.8, と豫言してゐる.

尙ほうし座 RV 星の變光曲線も 39日256と 1285日との二種の週期變動として表はし得るこいふ.

### 地球の大きさに關する基礎數値について

ニウトンやマクローリンの理論により地球を回轉橢圓體と見るときは、此の大きさや形狀を決定するために、下の三つの數値が必要である.

- a .....地球の赤道圈の半徑
- b .....地球の南北方向の半徑
- $\alpha$  .....橢率, 即ち  $(a-b)/a$

天文學界に於いては去る1911年のバリ會議により

$a = 6378200^m$       [之れは1907年に Helmhert が發表したもの]

$\alpha = 1/297.0$       [之れは1909年に Hayford が發表したもの]

$b = 6356911^m$       [之れは上の二數値から計算したもの]

が一般に用ゐられてゐるが、測地學や地球物理學では、1924年のマドリド會議により、1909年に發表された Hayford の値, 即ち

$a = 6378388^m$        $b = 6356909^m$        $\alpha = 1/297.0$

が採用せられることになつた.

此等の値は地上に於ける天體觀測及び重力觀測から算出せられるのが普通であるが、しかし尙ほ他の純數理的な方法もある. 今試みに  $a$  の値について近年發表された諸數値を擧げて見るこ、

$\alpha = 1/296.7 \pm 0.4$       [Helmert 重力觀測結果より]

$\alpha = 1/297.4 \pm 1.0$       [Bowie が重力觀測結果より]

$\alpha = 1/296.7 \pm 0.5$       [Heiskanen が重力觀測結果より]

$\alpha = 1/297.12 \pm 0.38$  [Veronnet が歳差の理論より]

$\alpha = 1/296.92 \pm 0.136$  [De Sitter が歳差の理論より]

$\alpha = 1/293.4$       [De Sitter が月の視差研究より]

$\alpha = 1/293.5$       [Brown から月の運動の理論から]

しかし、月の研究から算出したものは計算に尙多少の不安な點があるので今は始めの五つの平均を取つて  $1/297.0$  を用ゐるのが好さうである.

近頃、地球の赤道が正しい圓形でないこいふ議論がやかましくなつて來

た. 尤も之れについては既に第十九世紀の中頃, Clarke も言ひ出したことであるが, 今までに發表された結果を下に書き並べて見るこ,

計 算 者	大徑と小徑との差 $a'-a''$	大徑の經度	發 表 年
Clarke	3880m	東經15°.5	1866年[Sitz. B. Preuss. Akad (1915)676]
Helmert	230±51	西經17	1915
Berroth	150±58	西 10	1916 [B.z. Geophys. 14, 245]
Heiskanen	345±38	東 18	1924 [Veröff. Finn. Geod. Inst 4, 96]
〃	242±33	0	1928 [A, N. 5562]

### 月の平均經度誤差

目下, 英米の天體曆で用ゐられてゐる月の運動理論は米國Yale大學教授 E. W. Brown 氏の論文に據るものであるが, 此の論文は現代の最も優れたものであるけれど, 尙ほ, 之れによつて示される月の經緯度は必ずしも實際の月の位置と合致しない. 近頃 Brown 氏が Greenwich や Washington 天文臺での子午環による, 月の觀測と, 各地で行はれる掩蔽の觀測とから算出した結果を A. J. 901 號に發表してゐるが, 之れによると, 理論よりも實際の月の方が下表に示す通り大きい經度を示してゐる.

年 度	掩 蔽	Greenwich より	Washington より
1923	+7."87	+7."04	+6."80
1924	+7.78	+7.15	+6.93
1925	+7.49	+6.82	+7.02
1926	+7.25	+6.55	+6.71

因に東京の石井氏が1926年七月 9—10 日の日蝕寫眞から算出したものは  $+7."37 \pm 0."24$  である.

### ドイツの新刊書について

此頃のドイツ出版界の活躍は實に眼ざましいものであるが, 天文學に於いても其の例に漏れない. しかし此頃は單にドイツの原著ばかりでなく, ドイツ以外の國で出る良書を獨譯して更に一段と其れを良いものにして國

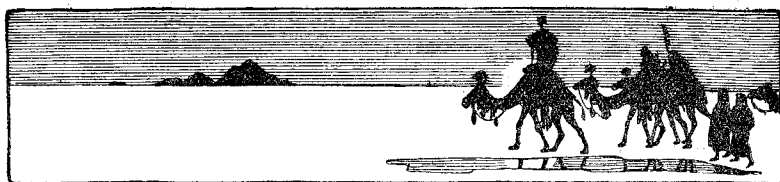


内國外に賣り出してゐる精力は嘆賞に値する。二三の例を言へば、さきに英國で出版された Eddington 教授の *Internal Constitution of stars* は E. von den Pahlen 氏によつて獨乙譯せられると同時に原著者の改訂増補が加はつて一層良いものになつた。又、同じ Eddington 氏の *Stars and Atoms* も O. F. Bollnow 氏に獨譯されて若干補増された。又 Jeans の *Dynamical Theory of Gas* も R. Fürth 氏に譯された。

### 米國コロンビア大學天文臺新館成る

米國 New York 市にある Columbia 大學の天文臺と言へば、其の貧弱なるここに於いて今まで世界第一の稱があつた。堂々たる米國式の大建築物の中に埋まつて、「便所か」と思はれるやうな憐れなドームを子午儀室がカムパスの一隅にあるに過ぎない有様で 1895 年以來今日までに及んだ。〔「天界」第 42 號第 243 頁を見よ〕。處が、同大學に今般物理學の新館が建設せられるに當り、天文台も大發展する事となつた。近着の *Popular Astronomy* 雑誌の卷頭に W. J. Eckert 氏の記事と寫眞とが載つてゐる。之れに據るに、此の物理學新館は聳え立つ十三階の煉瓦造りであつて、其の屋上に赤道儀用のドームを、子午儀室とが作られたのである。赤道儀としては A. Clark 製の口径  $12\text{吋}\frac{3}{8}$  といふ大きさのもので、自働裝置は電氣を用ゐる、尙ほ、ドームの開閉其の他も皆電氣を動力としてゐる。又、床 (floor) は昇降式 (rising floor) になつてゐる。子午儀の方は口径 4 吋の Bamberg 機で、天頂儀を兼ねるものである。

此の種の天體觀測器械を大建築の屋上に置くここに就ては、以前から總ての人が無望の極であるといふ風に考へて來たものである。實際此の惡例は Amherst 學院にある。ところが此度 Columbia の大學天文臺では、器械を置くための屋上床を、建築の幅員一ぱいの橋渡しにしたため、床上の水平動はあるけれど、回轉動搖は全く無く、甚だ好い成績を納めてゐるといふ。之れは將來の天文臺設計の好い一例である。因に此の天文臺長は H. Jacoby 教授である。



## 倉敷天文臺通信

- 第二十五回公開日、昭和三年一月七日  
開會天體觀望。
- 第二十六回公開日、二月四日開會、水  
野主事「太陽系總論」について講演終つ  
て天體觀望。
- 第二十七回公開日、二月十八日開會、  
水野主事「太陽の話」について講演、そ  
の後天體觀望。
- 第二十八回公開日、三月三日開會、天  
體觀望。
- 第二十九回公開日、三月十七日開會、  
水野主事「太陽黑點」について講演、若  
干の天體觀望。
- 第三十回公開日、四月七日開會、水野  
主事「地球の話」の題下に講演、後若干  
の天體觀望。
- 第三十一回公開日、四月二十一日開會  
京大天文臺中村要氏「流星の話」と題し  
有益なる講演をされた。
- 流星觀測、京都大學天文臺中村要氏は  
四月十八日來縣、同夜は岡山支部で、  
流星觀測、十九日は山本博士、中村要  
氏、水野主事同道、倉敷天文臺に參集  
したもの、曇天で觀測不能、原名譽臺  
長宅で夜更くる迄懇談して、翌二十日  
山本博士は高松に、水野主事は歸岡、  
中村氏一人居残り、二十三日迄流星を  
觀測された。
- 第三十二回公開日、五月五日開會、水

野主事「遊星發見の物語」をした、後で  
天體觀望

- 第三十三回公開日、五月七九日開會、  
會員奥田毅氏「重星」について講演、終  
つて若干の天體を觀望した。

○天文臺參觀人左の如し。

一月六日、矢掛中學校笹川教諭外六名

一月十三日、滿洲教育專門學校教授西  
岡永太郎氏。

廣島市逓信局電氣課長外四名。

二月二日、兒島郡藤田村錦、森井俊作  
氏外二名。

二月十八日、福山師範學校教諭林茂樹  
氏外三十二名。

二月二十四日、岡山縣女子師範學校教  
諭松本順之氏外六十八名。

岡山縣商工課笹井基氏外二名。

三月四日、宮城縣栗縣農學校教諭菅原  
稔氏外一名。

三月九日、岡山縣商松農學校教諭常光  
恭一外三十名。

三月十一日、御津郡宇垣村青年團員青  
木唯夫氏外十五名。

三月十二日、都窪郡中庄小學校訓導横  
邊光太郎氏外百三十名。

三月十四日、內務省狭間事務官外三十  
名。

三月十五日、邑久郡有隣小學校訓導山  
下八郎氏外七十七名。

三月十六日 吳海軍病院軍醫少佐佃卓  
三郎氏，同中尉松井三郎氏，

三月十七日 岡山縣內務部長外十名.

三月十九日 岡山縣內務部地方課森川  
治茂氏外三十名、

三月二十三日 廣島縣地方技師北川萬里氏.

三月二十四日 廣島縣御調郡栗原町農  
會細谷義一氏外十四名：

三月二十七日 東京府同好會員籐原武  
庸氏，第十師團經理部員三等主計正  
高須賀弘信氏外十六名。

三月二十八日 岡山縣山陽新報社寫眞  
班花谷一夫氏.

四月一日 廣島縣神石郡小島村青年團  
員若林專精氏外十二名・

御津郡牧石村青年團員木戸時夫氏外  
三十二名、

四月二日 關西地方新聞記者團四十名

四月九日 兵庫縣赤穂郡船坂農業補習  
學校教員原英夫氏外二十五名。

四月十三日 富山縣滑川米肥株式會社  
細田省吾氏外四名。

四月十四日 全同米穀大會員八十名。

四月十七日 廣島縣神石郡上村若林陸  
太氏外四名.

四月二十一日 滋賀縣立實業補習學校  
長藤豐氏外十九名。

後月郡高屋町青年團員二十名。

四月二十三日 京都帝大天文臺上島昇  
氏:

四月二十四日 阿哲郡親見農林學校根  
建森熙氏外一百名。

德島縣市場町立尋常高等小學校長岡部義雄氏外十三名。

四月二十七日 關西地方中學校長外七十六名。

丸龜商業學校教諭内藤萬壽夫氏。

四國善通寺商工會員三十七名。

四月三十日 廣島縣沼隈郡水谷村農工  
補習學校研究生杉原英治氏外五名。

昭和二年倉敷天文臺參觀人一覽表

[illegible]

静 岡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	5
東 京	—	—	—	—	—	—	—	2	1	1	—	—	4
宮 城	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
山 形	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
北海道	—	—	—	5	—	—	—	—	—	1	—	—	6
計	61	98	440	1259	1056	403	57	73	209	448	650	160	4914

備考 毎月二回の公開日・その他臨時公開日の参観人は本表以外であるから、昭和二年中の合計は六千人にのぼつたことゝ信ぜられる。

### 北極光を見た人の手紙

(前略)私として一代の珍現象に逢ふ事が出来るのです私として土地を離れず居ながらにして實物を観測否唯見たる丈にても智識として又自分の趣味として居る科學の一物に逢ふ事を心から楽しみにして居る事です。明治四十二年九月二十五日に北極光を見ました。生れて初めての事です。當時の有様を能く知り得て之を畫き残した人は未だ無いと云ふ事を札幌測候所で聞きましたので、尙更と思ひまして殊の外悦んで居ります。當時私が其の様を賞寫として原本を所持して子供教育上の参考にも残して居りますので、縮寫し、御参考になれば結構と思ひまして二枚丈差上様と考へましたのです。私は之に終る迄實見して居りましたが或る者が見たと云ふて測候所で畫工に揮毫させましたが夫れは北海の氣象と云ふ雜誌に出てありましたが、圖が偽りであります。見たものも充分の観測なく筆探る人も他人の云ふが儘なれば別物が出来たのです。故に所員に向つて之は虚であるからさて直させました。

私は其時一里許り沖合に(現住地出生地)柔魚の出漁をして居りました。明月で満天只一握りの雲もなく、陸風軟かく暖かく極静かでした。都合悪しく其の晩

に限り時計を持参しませんが、多分十一時半頃と思へました。北の空に當つて一等星以上例せば目前に於ける徑五寸位の青白い光が、ポツチリ出ましたが、變なものと思つて見詰めて居るに其光が一直水平に西の方に向つて延び走ります。早さは大概隕石の飛ぶ位です(目測)。夫れが一直水平の棒となつて約五秒間位止まり、漸次消へ失せます。其美しさは色で出せません。消えて約二、三分又出ます。前の通りで、今度は東へ延びました又出る、又出る。其美しさ、其氣味良さ約十回其通り西に東に上に下に繰返されたのです。同乗船者は其何ものか不審を抱いて居ります。私は極光なる事を話し徒然なく漁して居りました(第一圖)。最も十分位は何も出ません。此に私は之一回切りで終らず次には變形のもの出る事を豫想して熟視方向より他に目を廻しません。何分時計を持たなかつたのが残念でした。

次には目を付けて居る方面(先に見た場所)に何か少しく變つた色合がある様に思はれました。後十分位経るに少しく空に赤味が見えて來ました。(來れ……)と楽しみ勇んで居ました。するに(圖の山を以て地平線と假名します)地平線より

半圓形に赤味が出で漸次濃厚に至りました。其度合漬々梅干位になりますと、其圓内に一齊に地平線より上に向つて白條がスーッと出ました。思はず私が「それ出た」と叫びました。其凄いやら美しいと云ふか、一種變な氣になりました。何だか餘り大きなもの故自分の身邊にまで電磁氣が來て命事になるではあるまいかと、而しながら左様なるべき筈ないと思つて居ました。

其の白條が何れよりとなく、二、三條づゝ消へては、又出、消えては出、其様に全部が交々滅、出、運動するのです。之で更に又青白いのです。白條線は何れ

もが垂直であります。斯くの如く繰返すこと約三十分位でした。當時は見へた地方でも、多分磁石の傾斜が有つたらうと思はれます。斯うして追々赤味が薄くなり白條が薄くなり消へたのが一時半頃でした。大體此様な風でした。先づ二、三年の一度の目視して餘り變化のない。壯觀とも見へない日月蝕を見ても珍らしく思はるゝ場合に北極光を見ては呆然たらざるを得ない。先づ以て美し上ない。爾來私は天體に増々趣味を重ねて居るのです。(後略)

昭和三年五月九日

北海道爾志郡乙部村 澤田種治郎

## 北海の友より

稚内の近くの濱頓別と云ふ一漁村で昨夜は感度試験を致しました。プログラムで前から知つては居りましたが、先生の「最近の天體の觀測から」が、時々聞かれました。流星のこまなどお話しなされて居りましたが、長く聴く餘裕を持ちませんでダイマルを廻はしては他局を受けオーヂピリーメーターを働かせるのでございました。五つの受信機を交互に働か

せるので非常に忙しくあります。九日に札幌を出て、一ヶ所一日の割で感度測定を致して居ります。此の三十日頃一度歸札致します北極星が日毎に高くなります。今日は稚内に参ります。暇になつたならば、何か書かして頂きたいとおもひながら忙しさにまぎれて出来ません。

六月二十八日 米田 勝彦

## 岡山支部通信

○出羽君を迎ふ。一月五日大阪府から、わざわざ出羽君が來訪されたので、倉敷天文臺に案内した。

○西岡君來岡。一月十三日奉天から、西岡君が來岡され、岡山驛に出迎へたが、直ちに別れ、翌十四日倉敷天文臺に案内して、支部に迎へ歡談した。

○土星觀測會。六月は土星のかき入れ月であつたから、下記の通り觀測會を催した。

1. 六日 岡山支部例會を岡山市立商業學校で開いて、永野幹事は土星について話し、それから觀測したが生憎雲に邪魔され十分のこまは出来なかつた。坂本氏手製の六吋反射望遠鏡をも使用し

た。これが岡山市民が初めて覗いた反射鏡であつた。

2. 七日 土星の衝の當日、金木善三郎氏宅と栗山時政氏宅で――

3. 九日 谷口朋丞氏宅河内富次郎氏宅、關西中學校寄宿舎で――

4. 十日 平山大尉宅、平野大佐宅で――

5. 二十二日 岩月齋太郎氏宅縣學務課長宅、入澤賢治氏宅、羽原宇三郎氏宅、江見宏正氏宅山陽高等女學校長宅で――

6. 二十三日 金川中學校長服部純雄氏宅で晝は太陽の黑點を觀測し夜分土星を觀測する豫定であつたが曇つて駄目

7. 三十日 二十四日から降り續いた雨が霽れたので、支部で――